

マルコ 1・29-31

聖書を開いて今日の福音の箇所を読んで見ると、マルコ福音書では、今日聴いた福音は先週の福音に続けて語られていることが分かります。安息日の会堂で人々に教えを宣べ、汚れた霊を追い払われたイエスのみ業は、今日の福音では、安息日が明けた週の初めの日へと広がって行きます。イエスのみ業の開始をこのような時間設定をもって語り始めるマルコ福音書の語り方には、ある特別な意味が込められているかもしれません。

安息日は創世記の天地創造の箇所では、六日間の創造のみ業を終えられた神がお休みになられた日です。天地の創造主である神はそのようにして、この日をご自分の安息の日とし、聖なる日とされました。これが、神による天地創造のみ業を語る創世記が示す安息日の意味です。神によって創造されたこの世界の全てのものは、創造主である神が心安んじて、そのみ手を休めることが出来るほどに、神の目からご覧になっても調和に満ちた完全なものであったのです。「神はお造りになった全てのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。」と語られています。けれども、創造のみわざの完成であったはずの、創造主である神と神によって創造されたこの世界の調和に満ちた平和な安息は失われてしまったのです。神によって創造された世界の頂点に神の似姿として創造された人間である私たちが、創造主である神とこの世界の調和に満ちた安息を乱し、神が大いなる安息のために聖とされた原初の安息の日を汚してしまっただからです。天地創造をもって始まる旧約、新約の聖書の全巻は、創造主である神と、創造主である神が与えようとした安息の世界をかき乱し、それを我が物にしようとする人間である私たちの葛藤の歴史を語っているのです。神によって創造された最初の人アダムに始まる私たち人間の罪によって、神はあの原初の安息を放棄せざるを得なかったのです。こうして神の安息日の翌日が始まったのです。私たち人間を創造のみ業が目指した調和と平和に満ちた安息に呼び戻そうとされる、神の救いのみ業が開始されることになったのです。安息日の翌日にはこのような意味が込められているのです。安息日の翌日は神の救いのみ業が開始される翌日なのです。

私たちがミサに集う日曜日は、安息日が明けた週の初めの日です。その週の初めの日に十字架の死を越えて復活された私たち救い主イエス・キリストによってもたらされた神の救いのみ業を喜びたためるために私たちはこのミサに招かれています。マルコ福音書がイエスのみ業の開始を安息日と安息日の明け

た週の初めの日をもって語り始めることには、このような意味が込められているように思えます。

安息日の会堂とペトロの家で開始されたイエスのみ業は、安息日が終わった夕暮れに、イエスの評判を聴きつけて家の戸口に押し寄せて来た人々の中へと拡がって行きます。イエスがそこで目にしたのは、汚れた霊にとり憑かれた人々、病に苦しむ人々です。そのことによって、安息日の安らぎを味わえないでいる人々です。そのような苦しみの中で人々が求めているのは、失われた真の安息の回復です。汚れた霊を追い払い、人々の病を癒すイエスのみ業が目指しているものは、私たちの中に失われてしまった真の安息の回復、神がお望みになっている、私たちの救いとしての真の安息の回復である言えるでしょう。そのためにイエスのあの安息日の翌日の週の初めの日があったのです。

安息日の翌日の週の初めの日、イエスの祈りによって開始されます。「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れたところへ行き、そこで祈っておられた」と語られています。マルコ福音書のこのような語り方は、イエスの復活の朝を連想させます。マグダラのマリアと数名の婦人たちは、週の初めの日、あの朝早く、イエスの葬られた墓へと急いだのでした。十字架の死という、神がイエスに託された使命を果たし終えられたイエスは、この世においては、墓に葬られた者たちだけが味わうことの出来る安息を越えて復活されたのです。十字架の死によって成し遂げられた、神がイエスに託された救いのみ業を全ての人にもたやすために、イエスはあの週の初めの復活の朝を迎えられたのです。イエスのみ業の開始を語る今日の福音の中に、すでに、イエスのあの週の始めの復活の朝がほのめかされているとするなら、イエスを探して後を追ってきた弟子たちに言われたイエスのことばの意味を理解することが出来るように思えます。「皆が探しています。」とイエスの帰宅を促した弟子たちにイエスは言われます。「近くの他の町や村へ行こう。そこでもわたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」このことばの中に、週の初めの日、朝まだ暗いうちに置きだして人里はなれたところで祈られたイエスのお心の中が表明されています。あの祈りの中で、イエスは神の思いと一つになって、神がイエスに託された使命を確かめておられたのです。神がイエスに託された使命は、あの安息日の会堂とペトロの家で開始された救いのみ業が、近くの町や村、さらには、真の安息を求める全ての人々の所へと広がってゆくことだったに違いありません。だから、ご自分を探しに来た弟子たちに、あの時イエスはあのように言われたのです。

教会の伝統的な掟では日曜日は安息の日です。この日、仕事を休んでミサに

参加することが、カトリック信者としての私たちの信仰上の義務です。けれども、週の終わりの安息日から、週の初めの日に一日ずれた、私たちのこの安息の日の意味を再確認しなければならないかもしれません。私たちの主イエス・キリストは安息日にそのみ業を開始されたのです。そして、そのみ業は週の初めの日へと拡がって行ったのです。

今日の福音が語る、イエスのみ業が開始された安息日、会堂を出られたイエスは弟子たちと連れ立って、ペトロの家に行かれました。その家にはペトロの姑が熱を出して寝込んでいたのです。弟子たちがそのことをイエスに伝えると、イエスはその姑の手を取って起こしてくださったのです。イエスがそうしてくださることによって、熱は去り、彼女は一同をもてなしたと語られています。もてなしたと訳されていることばは直訳すると、仕えていた、仕える者となったということです。これが、あの最初の安息日にイエスがなさってくださったもう一つのみ業です。ペトロの家で、弟子たちだけが立ち会ったこのイエスのみ業は、私たちにとって特別に象徴的な意味が込められているように思えます。

イエスの救いのみ業は、私たち人間が失った真の安息を私たちに回復射させるために、神がイエスに託された使命です。その使命が全ての人々のもとへと拡がって行くために、イエスと弟子たちの週の初めの日を前にして、ペトロの姑はイエスに手を取って起こしていただくことによって、仕える者となることのできたのです。私たちがこの週の初めの日のミサにおいて祈り求めるべきことはそのようなことです。真の安息の回復を願って、仕える者となられたイエスのみ後に従うために、私たちも死者の中から立ち上がられた復活の主イエス・キリストに、今このミサの中で、手を取って立ち上がらせていただくことを願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高